

教科等横断的な視点を取り入れた授業実践

理 科

第 1 学年

《教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成》

○ 学習の基盤となる資質・能力の育成について

・問題発見・解決能力の育成

本実践の問題発見・解決能力とは、まず、事物・現象に疑問をもつことであると考えた。また、見いだした疑問を探究的な活動を通して解決する際の科学的な思考力および知識・技能を活用する力を解決能力であると考えた。さらに、「自信」「挑戦心」「感動」「協働性」など探究的な活動の中で変容した気持ちを表現することで、未来の学びに生かす力が育成することができる。これらの問題発見・解決能力は、「問題発見」と「解決」の過程が一体となり育成される資質・能力であると仮定している。そのため、「問題を見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」といった問題解決の過程を重要視することは基より、その過程において疑問が残った部分をさらに問題解決できるよう生徒の学ぶ姿を想起しながら授業計画を準備している。

・情報活用能力の育成

本実践の情報収集は、まず、結果をよく記録し、考察するための材料を整えることであると考えた。そのために、本校では、常にノートを使い、事物・現象の情報(結果)を精緻に記録できるよう指導計画を練っている。また、活用能力は、ノートと実物を往還しながら考察する能力や既習した知識を活用する能力のことであると考えた。そのために、スケッチや図、対話のメモ等の複数の情報から問いを解決できるよう手立てを講じている。

・言語能力の育成

本実践の言語能力は、問いに対して根拠のある考えを表現することであると考えた。そのため、自然科学の言語活動における問題の所在は、わかっていることや知っていることを言語化するだけでなく、未知なる事象を解決するために多様な見方・考え方を働かせた言語を伝え合うことにある。ゆえに、教師が安易に答えを教えるのではなく、他者の考えについて検討・改善したり、対話・記述を重ねたりしながら、多面的・総合的に検討できるよう手立てを講じている。

1 単元名 「大地の成り立ち」～総の台地の巡検を通して自地域の成り立ちについて考える～

2 単元の目標

- 巡検における記録、モデル実験などから自地域の大地の変動やつながりを理解することができる。
また、複数の露頭観察を通して図表やスケッチなどの記録の仕方を身に付けることができる。

＜知識及び技能＞

- モデル実験や巡検における予想および考察について、地層の重なり・広がりなどの既習の知識を活用して思考し、表現することができる。また、空間的・時間的な見方を働かせ予想をつくり、見通したことをもとに地層観察に取り組むことができる。

＜思考力、判断力、表現力等＞

- 疑問点について、知識及び技能、思考力を発揮しながら問題を解決するとともに、感得しながら自地域の成り立ちについて視野を広げようとしている。

＜学びに向かう力、人間性等＞

3 教科等横断的な視点を取り入れた授業実践について

(1) 単元で育てたい力

○地層累重の法則などの原理・原則、既習の知識との間に生じる矛盾を感じ、問いを見だし、複数の観察結果を関連付けながら科学的に思考して問題を解決することができる。

【理科：問題発見・解決能力】

○ノートに書かれた結果、予想などの記録を活用しながら観察するとともに、実物を観察したことから考察することができる。

【情報活用能力】

○自地域の地層のつながりに対する問題を解決するために、主として空間的・時間的な見方、比較・関連づけることなどの考え方を働かせた対話を重ねることができる。

【言語能力】

(2) 教科等横断的な視点に立った力

○校歌の歌唱活動を通して、総の台地や椿の海など自地域の地理的解釈を改め、興味・関心を抱きながら歌詞の意味を見いだそうとしている。

【音楽科：問題発見・解決能力】

○総の台地に点在する古墳とその石室内にあった史料の観察を通して情報を収集し、歴史的・地理的な見方・考え方を働かせながら対話し、古墳がなぜ自地域に多く存在するのかについて考えることができる。

【社会科：問題発見・解決能力、情報活用能力、言語能力】

(3) 共通の育てたい力

○理科、社会科においては、自地域の成り立ちについて、野外での活動から問題を見いだす。また、事物（試料・史料）を観察することから情報を収集することで各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら対話的に問題を解決することができる。

【共通：問題発見・解決能力】

(4) 「主体的・対話的で深い学び」の視点を生かした授業改善の工夫

ア 主体的・対話的で深い学びの視点から

本単元における問題の所在は、堆積岩や火成岩などを実験室で観察するだけでなく、学校を離れ、露頭が観察できる現地に赴き、大地の実際を観察することにある。地層巡検を実現することができれば、その地層から情報を収集・整理し、自地域の大地の変動を主体的に解決する授業へと改善することも可能である。また、本地域には、当時の堆積環境、異なる年代の地層、傾斜（隆起）、不整合、火山灰など複数の要素が起因して総の台地が成り立っている。これらの諸要素に気づきながら、問題解決するために、問題を見いだしたり、自分で取り組んだりする過程においては、実物との対話、記録との対話を重要視した計画を立案する。また、広げ深める過程においては、記録をもとに比較・関連付けて分析・解釈および考えを修正・追記できるよう班や全体での対話の場を通した授業づくりに努める。

イ 理科の見方・考え方の視点から

本単元では、主として空間的な見方を働かせて地層を観察することが望ましい。しかし、実態調査からは、本校に限らず、実際の地層に行けず、理科室における観察、実験等に終始している現状がある。つまり、ここで言う空間的な見方とは、現状も踏まえるならば、実際の地層を観察して働く経験に基づいた視点であると考えている。実際に、現地の予備観察では、火山灰の傾きや東西南北・四方への地層の広がりなど空間認知を鍛え・働かせなければ捉えられない事物が多く存在することを目の当たりに

した。そこで、次項の指導計画の立案の際には、「数 10km の範囲の地層がどのように広がっているのか」を定期的に異なる露頭で観察し、問題が解決できるよう設定した。また、観察する前には、ノート
の考察図から次の巡検ポイントの地層を考えさせたり、モデル実験の結果から予想させたりする中で
地層全体を俯瞰した空間的な見方が働くよう授業を改善した。

さらに、社会科と連携し、古墳の位置関係や古代の生活痕跡を探る活動を取り入れた。これらの活動
の中で、時間的・空間的な見方を働かせることが可能になると考えた。

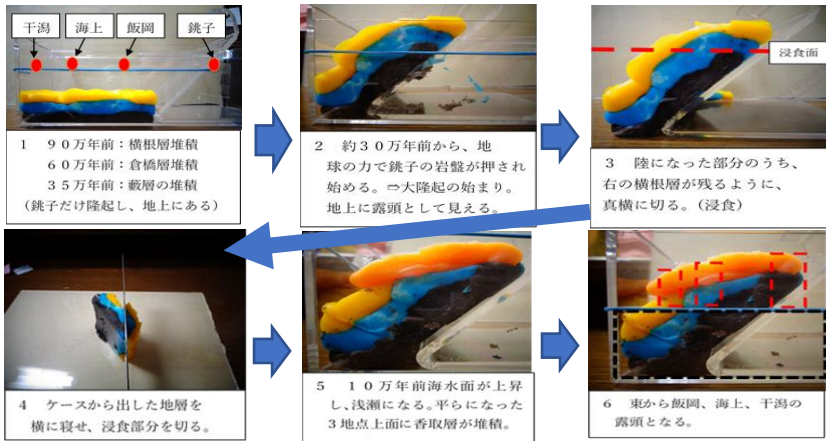
(5) 単元の評価規準

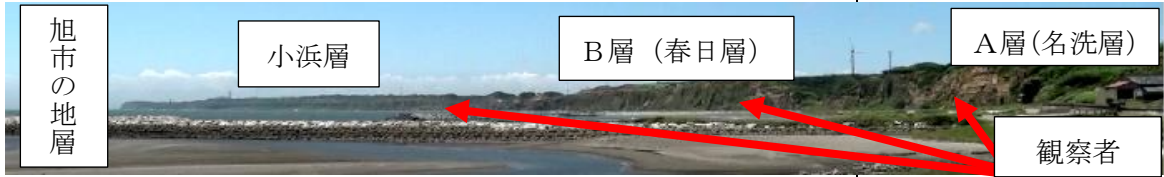
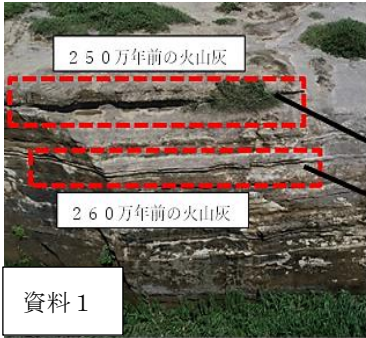
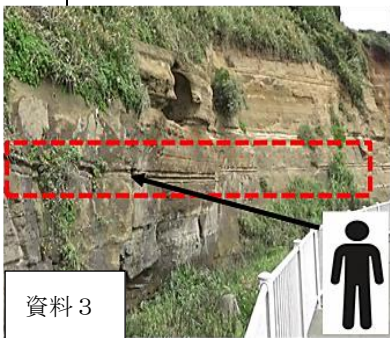
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
地域の地層の特徴とその変動に着目しながら、地層の堆積の仕方や広がりに関する原理・法則などを理解するとともに、科学的に探究するために必要なスケッチ、図表などの基本的な表現技能を身に付けている。	実際の地層観察で捉えた事象から問題を見だし、見通しをもって観察・実験を行い、その結果を比較・関連付けて分析・解釈し、表現するなど、科学的に探究している。	地層の広がりや大地の変動に関する観察・実験に進んで関わり、予想しながら見通しをもったり、考察および探究の過程を振り返ったりすることから科学的に探究する態度を高めようとしている。

4 指導計画 (21 時間扱い ※うち、理科の時数は、12 時間扱い)

※中学校教育課程の時数編成上、時間(コマ)は、理科を主として計上する。音楽科、社会科、総合的な学習の時間は、学習活動として連携したため、実際は、その教科独自の時数として計上している。

時	学習活動 ★教科等横断的な学習活動	備考 ★教科等横断的な学習 ◎記録に残す評価 □学習状況の確認
音 1 ～ 2	★校歌の歌唱活動【音楽科】 ○ 校歌の歌詞に目を通し、歌いながら歌詞を覚え、自地域の地理的認識を改める。 【見いだす】 学習課題 校歌からどのようなことがイメージできるだろう？ 実際の歌詞 一. 総の台地の 極まりて 干潟の広田 目もはるか 椿の海を 拓きたる 世々のいさおの のぼるる 干潟中学 わが母校 ○ 歌詞についてイメージしたことを発表し合う。【広げ深める】	□主体的に学習に取り組む態度 【行動分析・発言分析】 ★総の台地や椿の海など自地域の地理的解釈を改め、興味・関心を抱きながら歌詞の意味を見いだそうとしている。 【問題発見】
1 ～ 3	<u>総の台地の地層巡検(総の台地の露頭 飯岡、海上、干潟の3地点)</u> ○ 3地点の地層観察を行い、露頭からわかることをまとめる。 【自分で取り組む】【広げ深める】 観察・スケッチの指導 ・堆積環境を考察するため、地層の種類(砂層、泥層など)を特定する。堆積岩のブロックを生徒の手もとに用意しておく。	□思考・判断・表現 複数の地層観察で捉えた結果を比較・関連付けて分析・解釈し、科学的に探究している。また、既存の概念との矛盾に

	・当時の堆積年代を考察するため、火山灰の有無を観察する。火山灰の本数、太さなどに着目させ、噴火の特徴と関連付ける。 ・整合、不整合など堆積の仕方を考察するため、単層、複層、互層などの地層の特徴を特定する。また、おおよその方角を推定する。 ・大地の変動を考察するため、火山灰の傾きやズレを観察する。  旭市飯岡の露頭  旭市海上の露頭  旭市干潟（中学校付近の露頭）	気づき、問いを見いだすことができる。 □技能 科学的に探究するために必要なスケッチ、図表などの基本的な表現的スキルを身に付けている。 ★未知なる事象を解決するために多様な見方・考え方を働かせた言語を伝え合う姿を見取る。
	○地層の結果を分析してわかったことを発表し合う。【広げ深める】 ○地層巡検を終えての感想や疑問点などを発表する。 【見いだす】	
想定した問い ○なぜ、上層では同じ年代の地層なのに下層では違う年代の地層が見られるのか。 ○なぜ、飯岡、海上にあった火山灰が干潟の地層では見られないのか。 ○なぜ、同じ高さなのに同じ地層（年代、種類）が堆積していないのか。		
4 ～ 6	<u>総の台地の変動について～モデル実験による実証と再現～</u> モデル実験に取り組みながら、旭市の地層の広がりについて再現し、上記の問いを解決しようとする。 【自分で取り組む】  ○1～6の工程を「隆起の仕方」「侵食面」「海水面の変動」などの大地の変動に関する重要部を伝え合い、確認し合うよう助言する。 ○考察を班や全体に発表する。 【広げ深める】【まとめあげる】 ・同じ高さであるにも関わらず、違う年代の層が見られた理由などをまとめる。また、変動には、銚子の地層が関係していることを明確にし、次時の課題へと繋げる。 ○発問 旭市からさらに観察範囲を広げ、総の台地の東端にある屏風ヶ浦まで地層を観察すると、地層は、どのように広がっているだろうか？	□主体的に学習に取り組む態度 ◎総の台地について、モデル実験、班員との対話、ノートへの記述などから振り返り、探究しようとしている。 【行動・発言・記述の分析】 ★ノートに書かれた地層観察結果を活用しながらモデル実験に取り組もうとしている。 【情報活用能力の育成】 □思考・判断・表現 ◎屏風ヶ浦の地層の広がりについて予想できる。 ★未知なる事象を解決するために多様な見方・考え方を働かせて予想する。 【問題発見・解決能力】

7 ～ 9	<u>総の台地の東端にある屏風ヶ浦の地層観察</u>  学習課題：屏風ヶ浦の地層は、どのように広がっているだろう ○同じ火山灰に注目し、観察しながら遊歩道を100メートルごとに、西に歩く。 【自分で取り組む】 ・ 昨年の地層巡検の際、火山灰が傾斜していることを観察して捉えた経験と関連付けて火山灰層の傾斜が大地の隆起を裏付ける証拠となっていることに気づき、考察できるようにする。  資料1  資料2  資料3	□思考、判断、表現 ◎見通しをもって観察・実験を行い、その結果を比較・関連付けて分析・解釈し、表現する。 【発言分析】
10 ～ 12	○A層（名洗層）から斜め後ろに位置するB層（春日層）の方向を観察する。 【自分で取り組む】 ・「縞々模様」が斜めに傾斜していることを確認し、地層が斜めに隆起していることを観察する。 ・目の前で観察したA層と違い、離れた場所にあるB層を観察させる。観察の視点を変化させる。 ○観察した銚子の露頭と旭の露頭の傾きを関連づけ、考察する。 【広げ、深める】 ・ノートを基に、地層の傾きや隆起量について発表する。 ・地層の傾きや隆起量について考察を発表する。 ○巡検の過程を振り返り、科学的に探究する態度を高めようとしている。 【まとめあげる】	★複数の観察結果を関連付けながら科学的に根拠のある考えを記述、発言する中で、他者の意見を基に検討・改善することができる。 【言語能力の育成】
総 1 ～ 3	★総の台地に点在する鍋木古墳の謎に迫る 【総合的な学習の時間】 ○古墳探しを通してわかったことをメモする。 【自分で取り組む】 ・畑や神社の境内など、古墳が存在する場所をマップに記す。 ・古墳の形、大きさ、個数などをメモする。 ○古墳だけでなく、古い神社・仏閣、城跡などのすべて総の台地上に存在していることを教える。 ○次時に繋がるよう、古墳探しを通しての疑問点、感想等を記入しておく。 【まとめあげる・見いだす】	□主体的に学習に取り組む態度 ★古墳の形や存在する場所、個数などを確認しながら、自地域にある古墳に興味・関心や疑問をもつことができる。 【問題発見・解決能力】

	  泥内（でろうち）古墳（円墳） 鏑木神社境内古墳	★古墳の位置、形、大きさ、個数など古墳探しの観察を通して気づいたことを記録し、それらの情報を活用できるよう備える。 【情報活用能力の育成】
社 1 ～ 2	★総の台地に点在する鏑木古墳の謎に迫る【社会科】 ○自地域の古墳、奈良の古墳などの写真を提示し、何のために古墳がつくられたか考え発表する。 想定される予想 ・天皇のお墓、偉人のお墓、大和朝廷に関係のある人のお墓 ○自地域にも偉人がいたのか問い返す。 ○古墳探しの感想等の言葉を拾いながら、学習問題を立てる。 【見いだす】 学習課題 干潟地域には、なぜたくさんの古墳があるのだろうか ○自地域の古墳の石室から発掘された史料を観察したり、学芸員の話などを参考にしたりしながら、何のための物か考える。 【自分で取り組む】 ○何のために石室へ入れたのか班で考えを対話的に深める。他班の意見については、共有ソフト内に送信し、大型画面で提示し発表する。 【広げ深める】 ○なぜ、干潟地域に古墳が多いのかノートに書いた考察を共有ソフトに打ち込み送信し、発表する。 【まとめあげる】	★複数の史料（刀、土器、埴輪、双魚はい）、学芸員の話などを参考にしながら、情報を収集する。 【情報活用能力の育成】 ◎主体的に学習に取り組む態度 【記述分析・発言分析】 ★未知なる事象を解決するために多様な見方・考え方を働かせた言語を伝え合う姿を見取る。 【言語活動】

5 実践

（1）目指す生徒の姿

・学習の基盤となる資質・能力の育成について

ア 問題発見・解決能力の育成（第4～6時）

（ア） 生徒を見取る際の主なポイント

主として、発言と記述から分析し、評価した。

地層観察、モデル実験の結果を振り返り、分析・解釈しながら、

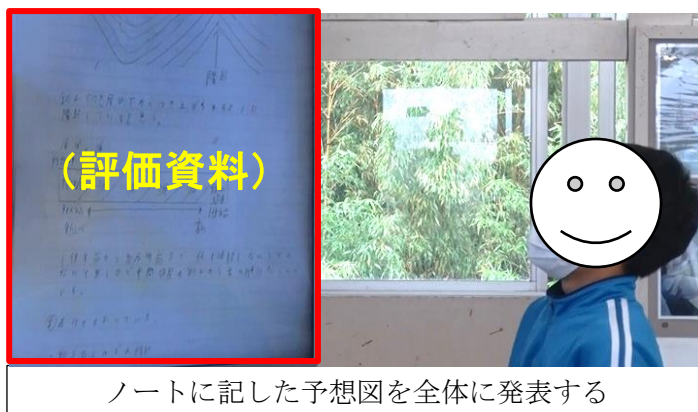
① 地層の広がりや空間的、時間的な視点を働かせながら予想している。

② 地層が堆積した当時の様子を時間的、実体的な視点を働かせながら予想している。

(イ) 指導と評価の実際

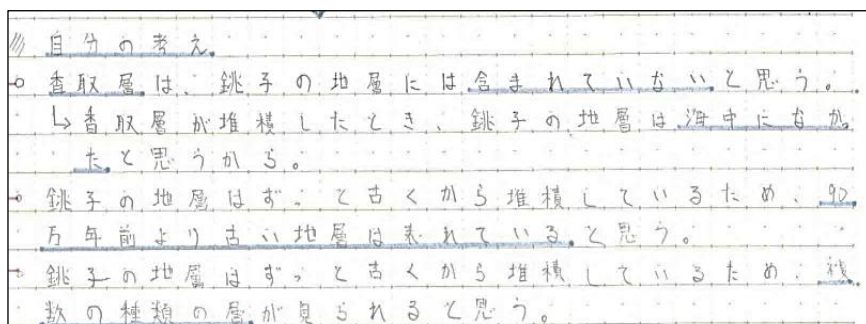
① 授業の概要

総の台地における地層の成り立ちを地層観察やモデル実験を通して理解する。その既習内容をもとに、総の台地の東端に広がる屏風ヶ浦の地層の広がりについて予想し、多様な見方を共有し、地層巡検に向けた観察準備を整えた。



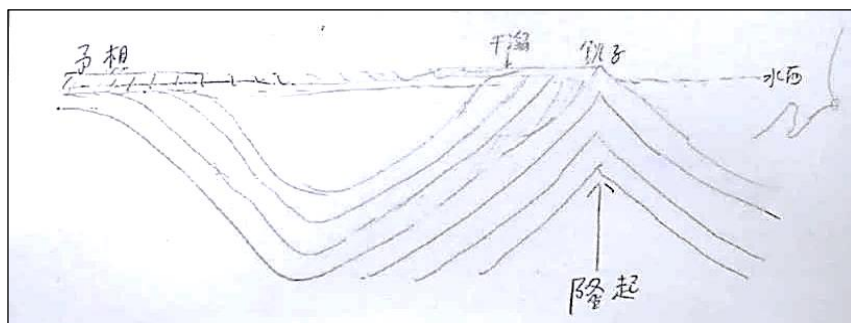
②実際の生徒の姿

○ 「おおむね満足できる」状況の評価例



複数の地層について、どのような広がりとなっているか予想することができており、既習の観察記録やモデル実験の結果などから根拠のある仮説を立てることができている。

○ 「十分に満足できる」状況の評価例



複数の地層について、どのような広がりとなっているか予想することができており、総の台地全体を俯瞰し、表現することができている。(ノートには、図だけでなく、根拠のある仮説も表現されていた。)

○ 「努力を要する」状況の評価例

総の台地の地層について、根拠のある予想が1つも見られない場合については、「努力を要する」状況と判断した。その上で、ノートの柱状図やモデル実験の結果を振り返りながら、地層の広がりをイメージできるよう個別に助言した。

イ 情報活用能力の育成(第4～6時)

(ア) 生徒を見取る際の主なポイント

主として、行動と発言から分析し、評価した。

地層観察の結果をもとに、「隆起の仕方」「侵食面」「海水面の変動」などの大地の変動に関わる事象をモデルによって表現しようとしている。

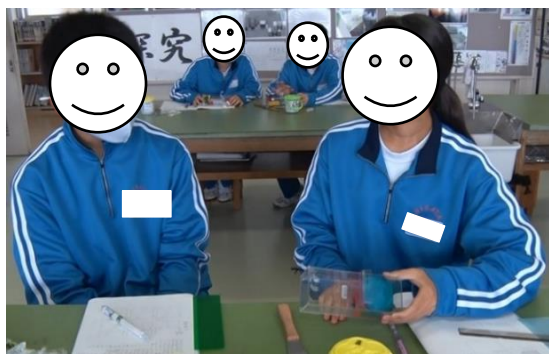
(イ) 指導と評価

① 授業の概要

巡検を通して知った3地点のそれぞれの堆積の様子(情報)を活用し、モデル実験により再現しな

がら、総の台地の地層の広がりや変動を表現する。また、大地の変動に関わる事象を表現しようとする様子から、既習の内容（情報）が活用できているか見て理解する。

② 実際の生徒の姿



「十分に満足できる」状況の評価例
「隆起の仕方」「侵食面」「海水面の変動」などの大地の変動に関わる事象を、的確に対話して伝え合うことができている。



「おおむね満足できる」状況の評価例
「隆起の仕方」「侵食面」「海水面の変動」などの事象に興味をもち、主体的にモデル実験に関わることができている。

○ 「努力を要する」状況の評価例

机間指導の際、ノートに再現されるべき事象が整理されておらず、教師の指示や教示、繰り返しの支援によってモデルを再現している場合は、「努力を要する」状況と判断した。

ウ 言語能力の育成（第10～12時）

（ア）生徒を見取る際の主なポイント

主として、発言と記述から分析し、評価した。

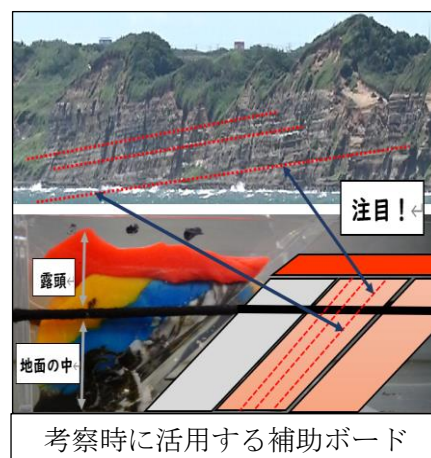
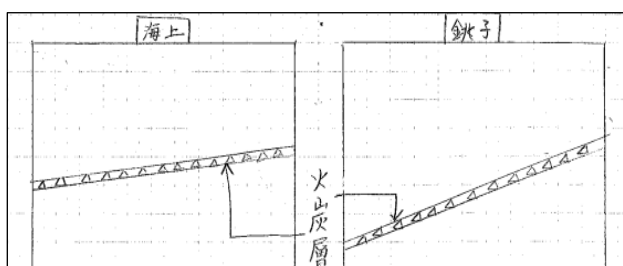
- ・空間的な視点を働かせながら地層観察の結果を分析・解釈し、
- ① 地層の広がりに対話的に検討・改善し、考えを深め、表現している。
- ② 地層の広がり既習内容と比較・関連付けながら考察し、表現している。

（イ）指導と評価

① 授業の概要

屏風ヶ浦の地層観察を通して、注目した火山灰が傾斜していることに気づけるよう、300メートルに渡り、追跡調査した。その火山灰と以前に観察した他地区の火山灰の傾斜を比較し、モデル実験の結果と関連付けたり、考察を対話的に検討・改善しながら総の台地がどのような地層の広がりとなっているのか総合的に振り返られるようにした。

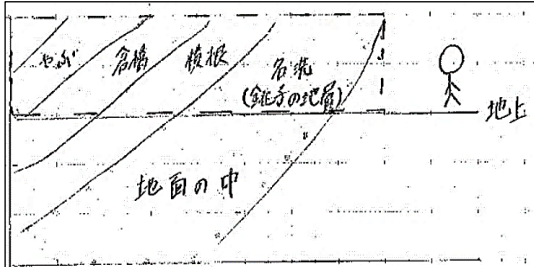
② 実際の生徒の姿



「おおむね満足できる」状況と評価した例
既習の観察記録と比較して、火山灰の傾斜から、大地の変動や地層の堆積の仕方について表現することができている。

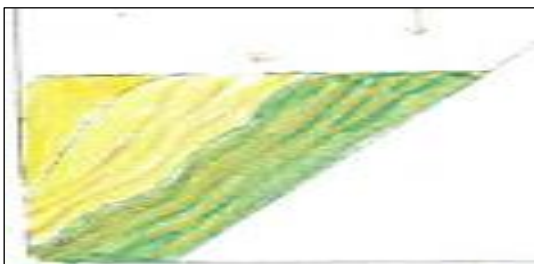


火山灰の傾き以外にも他者からは、左図のような形で「地下への地層の広がり」「プレートとの関わり」などの視点も発言されおり、これらの他者意見を基に考察を検討・改善することができれば、「十分に満足できる」状況となるであろう。



「十分に満足できる」状況の評価例

既習の記録と他者意見とを関連付けながら、地層の広がりについて多面的・総合的に考察している。記述や発言からは、地上だけでなく地下の地層の広がりを推論することができている。



「努力を要する」状況と評価した例

地層の特徴については捉えることができていますが、過去の記録と関連付けることができていない記述に関しては、「努力を要する」と判断した。級友のノートや補助ボードを用いて、支援した。

エ 言語能力の育成（社第1～3時）

（ア）生徒を見取る際の主なポイント

主として、記述や発言から分析し、評価した。

- ・古墳探しや石室内から出土した史料を振り返りながら、
- ① 何のために石室へ入れた物なのか意欲的に考えようとしている。
- ② なぜ、自地域に古墳が多いのか考察し、表現しようとしている。

（イ）指導と評価

①授業の概要



学芸員と社会科教諭、研究主任とで授業構想を練る様子



古墳から出土した史料を触り、じっくり観察している様子



石室の資料や古墳について考察を発表している様子

自地域の成り立ちについて、前時までは、音楽科による歌唱指導、理科による地層巡検の側面から探究してきた。本時では、総の台地の古墳群と出土した史料から、自地域の成り立ちを推測する。大和朝廷の勢力が東征により強まってきた時に、なぜ本地域には、特異的に多く古墳が存在するのか、多様な見方・考え方を働かせながら未知なる事象を解明しようとする態度を養うための支援を

する。自由闊達に想像する活動を通して生徒が自地域に対する視野を広げられるようにする。

②実際の生徒の姿

「おおむね満足できる」状況と評価できる例

石室に武器があったのは、生前に武士として活躍していた勲章を知らせるためのものであると思う。また、奈良の古墳のような大きさではないので、古墳をつくるということが身近になり、総の台地は、その当時、村が栄えていたと思う。

👉 実際の観察結果を基に、奈良と自地域における古墳の違いや当時の人々の暮らしを考えようとしている。

「十分に満足できる」状況と評価できる例①

石室に全国で〇個しかない〇〇〇が出土したということは、権力のある人物がいること示すものなのかもしれない。〇〇地域は、大和朝廷の影響を強く受けた地域の1つであったのではないか。また、総の台地の下は、樺の海が広がり、物資などが運びやすく、村が発達していたのではないかと思う。

👉 出土した史料には、どのような意味があったのか見だし、自地域がその当時どのような暮らしをしていたのか地理的な側面から考えようとしている。

「十分に満足できる」状況と評価できる例②

刀や〇〇〇があるということは、弥生時代よりも飾りやファッションへの意識が高かったのではないか。また、お守り、魔除け的な意味を込めて石室に入れたものとも考えられる。自地域では家族長、村長など少し位の高い指導者をもとに古墳をつくっていたのではないか。

👉 弥生時代の暮らしを思い起こし、古墳時代の暮らしを具体的に考えようとしている。

○ 「努力を要する」状況と評価できる例

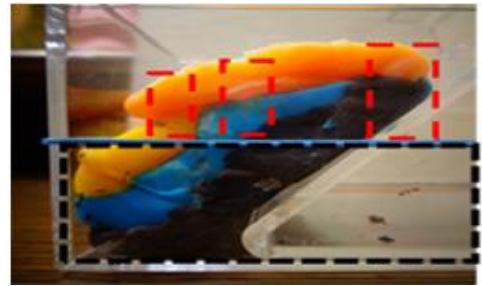
本時では、「何のために石室へ入れた物なのか」「なぜ本地域には古墳が多いのか」という2つの問いに対して、1つも考えがもてない状況であった場合、努力を要すると判断したが、そのような状況となった生徒はおらず、まずは、問いに対して自分の考えをもって取り組んでいる様子が見られた。

(2) 実践を終えて

1 学習の基盤となる資質・能力育成について

本単元における問題の所在は、学校を離れ、露頭が観察できる現地に赴き、大地の実際を観察することにあつた。まずは、自地域にある露頭観察(3地点)を可能にするカリキュラムを構成し、実験室で取り組んで得た堆積の概念とは違う実際を露頭から得ることができていた。生徒は、この点に矛盾を感じ、疑問点を見いだすとともに、探究しようとする意欲の高まりが見られた。生徒の感じた疑問も、露頭での観察を重ねるごとに、それぞれの露頭で得られた情報をもとに感じた矛盾やギャップの内容へと変容してきた。この疑問を解決するためには、総の台地の地層全体を俯瞰して見られるようモデル実験による解決を促した。

右図のように粘土（黒、青、黄）で模した自地域の柔らかい地層を、傾斜したアクリル板で模した地層（古い地層およびプレート）が押すことにより、総の台地の地層が再現することができた。このモデル実験の教材を開発できたことで、総の台地の地層が再現されるまでの過程をノートへ記述したり、班員と対話したり、自分のモデルと他者のモデルを見返したり、最終的には、観察の結果とモデルの再現の整合を図ったりと、問題解決に必要な情報を処理していることが見受けられた。



一方で、「侵食面」「隆起」「不整合」「地上と地下」というように台地の成り立ちや地層の広がり再現する過程における情報が多いため、板書によって成り立ちの過程を整理したり、演示実験によって侵食の再現を教えたりしながら、適時、情報を整理する指導・支援に努めた。これらの実践により、それぞれの部分で見ていた一つ一つの地層の情報を、モデル実験によって統合して処理したことで、地層の全体像として理解する様子が確認できた。また、単元の終末では、言語を生かして多面的・総合的に本地域の地層の広がりや大地の成り立ちを振り返ることを目標とした。ここでは、総の台地の東端にあたる屏風ヶ浦から情報処理し、その場で、対話的に地層の広がりについて考えを交わした。現地での対話により、実際の露頭と生徒の考察を往還させながら考えを広げ・深めるなど、現地で情報処理したことを言語化する貴重な場ができたと思った。一方で、情報が処理できなかった姿も想起し、補助ボードによって支援したが、今後は、タブレットによる記録等も1つの手段であると考えた。

2 教科等横断的な視点に立った評価について

理科、社会科の学習では、自地域の成り立ちについて考えるというテーマの中で、地層や古墳の問題解決学習に取り組むことができた。問題発見・解決能力を評価する際には、現地の地層や古墳で観察したことから「問い」を見いだした後、モデル実験、石室の史料観察等の過程を経て問題を解決する姿が見られるなど、問題解決する生徒の姿に類似性が多く見られた。さらに、この問題解決では、相応して情報を活用する姿、言語化して対話的に解決を図ろうとする姿も見られた。

また、古墳の授業では、石室の史料を観察するとともに学芸員の方から情報収集し、時間的・空間的な視点を働かせながら太古の人々の暮らしや自地域の成り立ちについて考えることができた。この点においては、自地域の地層の広がりや空間認知すること、地質年代や地層の厚さから時間軸を考えることなどと評価する観点の類似性があり、指導と評価が一体化しやすく、今後も教科等横断的な学習として計画することが可能な領域であることが確認できた。

3 主体的・対話的で深い学びについて

本実践では、主体的に取り組む態度が涵養されつつあると感じたポイントとして、自地域の素材の教材化と教育課程の連携を図ることができたからであると考えている。生徒は、自地域の地層、古墳などの実物を観察するごとに、主体性を高めながら問題解決を図ろうとする姿が見られた。

また、自分事になった問いを前提にした対話が繰り返された。対話を機に、考えが改善され、自地域の地層や古墳への見方が変わり、視野を広げている姿が確認できた。